

いかこい

平成23年度 第1号 発行NO.29

祝入学

平成23年度「まつえ市民大学」が開講した。新入生は10コースに分かれて学習する。今年のテーマは「未来へつなぐ松江力」で先人が培った文化や歴史を学ぶと同時に新しく発展する松江を学習する。新入生達は、生涯学習の場として自ら学び、人生を楽しく心豊かに過ごすことを誓った。

自ら学び学習成果を地域で生かす！

5月15日プラバホールで、まつえ市民大学の入学式が行われ、456名が入学した。



新入生代表・山口槇子さんが「自ら学び、学習成果を地域社会に還元し貢献する」と決意を述べた

式辞で福島学長は、先に発生した東日本大震災のご冥福とお見舞いを述べて、「その時の被災者の整然とした態度は全世界の人々が驚嘆の眼差しを送っていた。この態度こそ日本人が持つ高潔な感性ではないか。まつえ市民大学で、そのような感性を磨き、実践力の向上を図るよう願っている。今後は行政指導でなく市民が主体となるまつえ市民大学を作っていくことを目指している。新入生の皆さんは、自ら学び、



（日野）でや湯と茶のたんとさ藤岡さん

記念講演

松江をひも解く

入学式の記念講演で、松江歴史館館長・藤岡大拙さんが「豊かな歴史のまち・松江」と題して講演した。「出雲には、長い歴史のひだのよつなものが積み重なりその結果として松江がどういふふうな雰囲気、趣を持つようになったのか。松江の南部には、古代出雲の文化の中心、古代文化の折り重なりがある。北部には、松江城を中心に江戸時代の文化がある。それを大きく包んだものが松江である」と語り、古代出雲文化から江戸時代、近世までの歴史の流れを熱弁、受講生の学習意欲を刺激した。

講座

一人芝居は黄金の時



放映中のTVドラマ「下流の宴」のおばあちゃんのモデルは母親と語る林さん

直木賞作家の林真理子さん。小説を書くものとして、日々どのように考えているか、明快な語り口で自己葛藤を語った。作家は何かしら家庭に問題を抱えている。だから小説が書けるのだと言つ。母親が嘗んでいたのは小さな本屋。幼いころから本に囲まれて育ち、なるべくして作家になったのかなという林さん。コピーライター、エッセイスト、小説家と道を歩んだ。自分が小説

家に向いている要因を3点上げた。心身共に健康である。意地が悪い。想像力がある。主婦として、作家として、大車輪の日々である。プレッシャーに強く、仕事量も連載物を始め大量にこなしている。また、放映中の「下流の宴」や進行中の「源氏物語」、構想中の医療問題など、独自の視点で社会の断面を鋭く切り裂く。渡辺淳一をして「君の小説は意地が悪い」と言わしめている。想像力は妄想力と言いがら、その人物になりきり、一人芝居をしていると台詞が次から次へと出てくる。作家にとって黄金の瞬間を楽しんでいる。講演ではご主人の関白ぶりを並べていたが、父の日にはご主人の好物の「手巻きずし」をとブログに。気配りの方でもある。（備谷・和田森）

シニアコース

県立図書館司書で資料情報部課長・矢野信夫さんに「時空を超えたコミュニケーション」読書」と題して話を聴いた。その後、日ごろは立ち入りできない書庫を見学した。



時代の読み聞かせ体験が、彼らの読書人生を左右すると語る矢野さん

県立図書館は図書75万冊所蔵、そのうち地下書庫に40万冊を収蔵。そこは図書館の心臓部で、きれいに分類された本は床から天井までぎっしり並び、江戸時代の和とじの本を手にとってみると虫食いの跡が時代を物語っている。「人間は言葉と文字を使い文

本は待っている

書庫を見学、本の数に圧倒される受講生の出来事に限られ、また同時に多くを体験することはできない。しかし、本には会話したくても会話できない過去の人や、外国の人の考え方が詰まっている。本は時間と空間を超えて無限に体験ができる。図書館はそんな文字として存在する本を貯蔵する所。図書館では、本があなただけをいつでも待っている」と矢野さん。（米井・川本）



文化と文明を築き発展してきた。図書館はパピロニアの昔よりあった。『百聞は一見にしかず』と云い、読書を軽視しがちであるが、実体験は鮮烈である。今も現世の出来事に限られ、また同時に多くを体験することはできない。しかし、本には会話したくても会話できない過去の人や、外国の人の考え方が詰まっている。本は時間と空間を超えて無限に体験ができる。図書館はそんな文字として存在する本を貯蔵する所。図書館では、本があなただけをいつでも待っている」と矢野さん。（米井・川本）

農業コース

泥の感触も心地よく 水稲「きぬむすめ」の田植えを

今年度から新しく加わった「農業コース」。野菜作りや水稲栽培など、農業全般にわたっての基礎知識を学ぶ講座で、他の講座より一足早く4月に開講した。農業に関心を持つ受講生15名が、岸本正塾長・石野悟講師から、来年1月まで、毎回品目ごとに座学と実習で学んでいく。



両端の人がロープを張り、それに沿って20cmの間隔に植えた

今回は島根県の推奨品種「きぬむすめ」の田植え作業を体験した。田植えは、昔ながらの手植え方式。初めて水田に入った受講生も多く、バランスとりも一苦労。横一列にならび、ロープに沿って苗を植えた。最初は苗の本数も植える位置も少しずれていたが、慣れるに従って苗3〜4本を手早くまとめて植えられるようになり、きれいな早苗の直線が出来上がった。受講生の1人は「素足で感じた生暖かい泥の感触は、忘れられない。田植えは、初めての体験で足をとられたが、きれいに植える事が出来て良かった。今後、順調に成長し、稲刈りや収穫祭を楽しみにしている」と満足そうに語った。「きぬむすめ」は温暖地向けの品種で、「コシヒカリ」と同等の品質と食味を持ち、安定した栽培特性を備えている優れたものであり、県内各地で栽培されている。

早速収穫！ キュウリ&ピーマン

5月の連休明けにはキュウリなどの夏野菜を植えた。生育に合わせての日常管理を学びながら、受講生も野菜も順調に成長している。



5月 キュウリの苗を植えるを支える支柱を立てた



6月 キュウリのもぎ方を教わり収穫の喜びを味わう

6月初収穫はキュウリ。その場で試食し、無農薬の甘くみずみずしいキュウリ本来の味と、手作りの感激を味わった。（中島）

松江の新しいスポット

ふるさと発見コース

松江藩旧家老屋敷の跡地に3月に開館した松江歴史館。新庄正典学芸員から城下町形成の経緯や町並みについて話を聴き、館内を見学した。

長屋門をくぐるように、しつこい塗りの武家屋敷風の建物が威容を放つ。屋根には松江特有の6万枚のいぶし瓦が来館者を圧倒する。

開府400年祭の締めくくりの年に開館した歴史館。総事業費39億円。新たな観光名所として、また、松江開府以降の歴史資料の保存、調査研究



ここではゆっくりとお城を眺める

の拠点として市が整備した。建物は、中心施設の本館と家老長屋、入り口の長屋門から成り、日本庭園も有している。

本館の基本展示室では、江戸時代の文化や暮らしぶりを、古文書や資料展示だけでなく映像や模型、音声を用いてより分かり易く紹介している。

また、歴史館の建設時に発見され、保存するか否かで議論を生んだ400年にわたる家老屋敷の遺構は、ガラス貼りで見学できるように保存され、江戸の香りを放っている。



開府当時の城下町のジオラマで町づくりを説明する新庄さん

喫茶室から見る、県木クロマツを中心とした枯山水日本庭園越しの天守閣は絶景。まさに、お城が見える博物館である。ここは江戸時代からの400年だけをギョッと詰め込んだところ。弥生時代からの文化を残す出雲平野の中で、松江市街地だけは江戸文化を主張する。この喫茶室は無料で休憩できる。お掘端を散策する途中で、ゆっくり立ち寄りしたいミュージアムである。(阿武・須田)

燃やすから溶かすへ たたら技術

環境コース

循環型社会の実現に向けて多様なごみの最終処分先を目指した新ごみ処理施設の取り組みを見学した。



近代的工場の「エコーライン松江」。次々ごみが搬入される

今年4月から稼働を開始した鹿島町の「エコーラインまつえ」(ごみ処理場)で、ごみ処分の過程を津本潔場長から学んだ。家庭や事業場から搬入されたごみは、受け

入れ場所の「プラットホーム」から「ごみピット」と言う大きなごみ収集部屋へ集められる。ここで大型クレーンでごみの種類が均一になるように混ぜ合わせる。

混ぜ合わされたごみは、「ガス化溶融炉」へ運ばれ、熱分解ガスでごみを乾燥させ、酸素の少ない状態で高温にさらすことにより、有機物が分解され、可燃性のガスになる。発生したガスは、燃焼させその熱エネルギーで発電し、当施設の電気をまかなっている。余った電気は中国電力に売却される。

ガス化されずに残った不燃物は高温で溶融され、マグマの様に液状に溶けて、溶融炉から出てくる。これを急冷してメタル(鉄)とスラグ(砂)に分離し、鉄ウエイトやコンクリート製品として再利用



最後に残った不燃物が高温で溶けて出る

この施設の完成によって、不燃物処分場への搬入が減り、使用寿命が7年から40年に延びた。循環型社会を実現する、総合的な環境保全に貢献できる施設だと津本さんは説明を結んだ。きれいな工場のようなイメージに驚きながら、受講者からは「家庭での分別処理が、随分と楽になった理由がよく分かった」との声がある中、「でもごみを減らすことが一番大切だ」と主婦としての一面も見えた。(備谷・中島)

シニアいきがいコース

松江市教育委員会小中一貫教育推進課長・園山信夫さんが「みんなで学校を支え、みんなで子供を育てる」と題して、松江市の小中一貫教育の取り組みを聴いた。



シニアが先ずから地域の子供を指導する園山さん

近年、社会の急激な進化、少子化、情報化など形態の変革で、多くの教育問題が生じている。また、子供たちの体の成長、思春期の早中期化(始まり時期が中1から小5に)も進み、現状の小中を区分しては対応しきれない。中学入学後に、不登校が急増する「中1ギャップ」と

支えて育てる一貫教育

呼ばれる現象もある。そこで義務教育9年間を見通した一貫教育が急務で全国に広がっている。松江市では中学校区の単位で、小中9年間を4・3・2の区分に分けた教育プログラムを作成。平成22年度から本格実施がスタートしている。

縦の一貫教育として小中教員の相互乗り入れ授業、小小、小中児童生徒の交流。横の一貫教育として保護者、公民館、町内会など地域推進協議会を中心にボランティア活動を展開。例として、小中家庭科支援、夏休み補充学習支援、読書活動支援、など多岐に渡る。

園山さんは「気軽に学校へ来ていただきたい。学校と地域が一体となり小中一貫教育を支えて欲しい」と訴えた。(日野・和田森)

建築美を探る

美術コース

古民家研究会を主宰して活躍中の成相脩さんから松江城、興雲閣を建築学的な視点で話を聴いた。



松江城

松江城では堀尾吉晴が作った古い石垣にいろいろな刻印を採す。石垣の造り方や算木積みの方力学的強度を解説。明治36年に天皇の行幸宿所として作られた興雲閣。これは建築家



興雲閣

が作ったものでなく大工が見よう見まねで作った擬洋風建築という。興雲閣は外壁板の張り方が長崎に多い、目的地をとり目透かしにして平らに仕上げている「ドイツ下見板」様式。欧州から中国を経由し、西から来た。横浜では板を羽重ねにする「イギリス下見板」様式が多い。欧州からアメリカを経由し、東から入ってきた。日本建物が存在するという成相さんの話は興味深かった。(米井・山口)

サポーターの会



バザーへのご協力ありがとうございました。(6月25日)

入学式時の東日本大震災の義援金は32,360円でした。バザー売上金の一部(10,000円)と合せ被災地へ支援します。ご協力ありがとうございました。

松江水燈路参加行事「行灯づくりの店」の開催日が決定。9月18日、9月24日、10月1日、10月8日。(予備10月15日)受講生のみなさんの参加を募集中。

ティータム

入学おめでとうメッセージ。

林真理子さんは講演で「被災地を訪れ、諸行無常を感じ、本で何ができるかと悩んだ」と語った。書かれた文字は、時空を超越しわれわれに多くの学びを与えてくれる。その学びは自分を成長させ、生きる希望へとつながっていく。学び心がある。はじめて新たな知恵が生まれてくる。学び心が繁栄へまず第一歩である(松下幸之助) 今学べる瞬間のあることを大切に、生涯学習に取り組みたいものである。

編集担当まつえ市民大学レポーター) 阿武貴子・河上栄子・川本道子 須田敬子・中島実・林谷行矩 日野道生・備谷豊・山口横子 森勝男・米井美弥子・和田森洋一 問い合わせ先 松江市民活動センター まつえ市民大学事務局 Tel) 08552(32) 0894 Fax) 08552(32) 0847 メールアドレス mcu@city.matsue.ig.jp